

問題言及場面への効果的な治療的介入に関する臨床心理学的研究

—悪循環に陥っているカップルの役割関係に着目して—

鹿児島純心女子大学大学院 石 井 宏 祐

石井（2006）は、問題言及場面におけるカップルのコミュニケーションの認知的側面について検討し、パートナーとのコミュニケーション認識尺度を作成した。さらにそれと問題解決度や会話満足度との相関を検討し、「和やか」「真剣」のコミュニケーションが多いと認識しているほど問題解決度が高く、「和やか」なコミュニケーションが多いと認識しているほど会話満足度が高いことを示唆した。これらの問題言及場面におけるコミュニケーションの認識は、日常場面におけるカップルの役割の認識と関連している可能性がある。そこで本研究では、日常場面における役割の認識と問題言及場面におけるコミュニケーションの認識の関連を検討し、問題解決により有効な介入を検討することを目的とする。

手続きとしては、18歳～28歳までの男女104名を対象に、交際しているパートナーに対する問題言及場面での自分のコミュニケーションの認識やその問題の解決度、会話の満足度、そして役割関係に関する質問紙調査を行った。パートナーとの役割関係に関する認識の質問項目を因子分析した結果、2因子が抽出され、それぞれ「役割柔軟因子」「役割固定因子」と名づけた。また、各因子の下位尺度得点と、パートナーとのコミュニケーションの認識尺度（石井, 2006）から得られる「和やか因子」、「積極因子」、「回避因子」、「真剣因子」の各下位尺度得点、さらに、問題解決度得点、会話満足度得点との相関を検討した結果、「役割柔軟因子」と「和やか」因子、問題解決度得点、会話満足度得点に正の相関が見られた。

結果から、カップルの役割関係が柔軟であるほど、問題言及場面においても和やかなコミュニケーションを行っていると感じられることが示唆された。また、役割関係が柔軟であるほど、問題に対する解決達成感や会話の満足度も高くなることが示唆された。

これらより、役割の柔軟性を高めるといったより間接的な介入も、問題言及場面における問題解決に有効であると考えられる。

キーワード：役割、家族療法、介入課題、問題言及場面、カップル、コミュニケーション

I 問題と目的

1. はじめに

近年、ドメスティックバイオレンス（DV）やデートDV、仮面夫婦や家庭内離婚という言葉の出現など、関係が良好であるとはいいいがたいにもかかわらず、それが維持されていく状態を記述する用語が増えているように感じられる。カップルや夫婦の関係は、持続を見込んでの関係であるがために、様々な不一致などの問題が生じてくるのは至極当然のことであろう。しかしながら、それ

が解消できないほどの大きな問題となってしまうと、関係が維持されることがあるのである。関係が維持されるためには、問題の解消を目指した何らかの方策がとられていると考えられる。しかしその方策がうまくいかないとき、関係は維持されるが問題もまた維持されるという望ましくない事態を陥ってしまうことがある。問題の解消を目指した二者のコミュニケーションが、残念ながら望ましくない結果を招くとき、そこに悪循環を想定し、積極的に断ち切る手伝いをしていくのが家族療法の立場である。

問題の解決を目指す方策の一つとして、当事者間での話し合いが考えられる。家族療法でよく用いられる合同面接場面においても、夫婦などクライアント間の問題についての会話がなされることが多々ある。家族療法のMRI (Mental Research Institute) アプローチでは、クライアント間のコミュニケーションに着目し、時に介入を行うことで問題解決を目指すのである。

さて、石井 (2006) は、セラピストが問題維持の悪循環に陥っているコミュニケーションに介入するとき、どのような介入が有効なのかに着目し、家族療法の視点から、当事者間の認識の検討を通して、問題言及場面において、問題解決に有効な介入を検討している。手続きとしては、18歳～28歳までの男女113名を対象に、交際しているパートナーに対する問題言及場面での自分のコミュニケーションの認識やその問題の解決度、会話の満足度に関する質問紙調査を行っている。パートナーに対する自分のコミュニケーションの認識の質問項目の因子分析を行った結果、4因子が抽出され、それぞれ「和やか」「積極」「回避」「真剣」と命名された。また、各因子得点と問題解決度得点、会話満足度得点の相関を検討した結果、問題解決度と「和やか」得点、「真剣」得点に正の相関が見られた。また、会話満足度と「和やか」得点に正の相関が見られ、「積極」得点、「回避」得点との間に負の相関が見られた。この結果より石井 (2006) は、コミュニケーションに介入するとき、クライアントにとって受け入れやすいと考えられる、「和やか」、「真剣」を拡張していくのがより有効であるとのべている。

そこで、本研究ではこの先行研究を受けてさらに、これらのコミュニケーションの認識が、カップルの役割関係のありかたとどのような関係があるのかについて検討していく。

2. 役割理論

従来、役割は役割理論 (role theory) の文脈で論じられてきた。1930年代前後に活躍したミー

ド、モレノ、リントンらが役割理論の発達に大きく寄与したといわれている。今日、役割理論は心理学、社会学、人類学にまたがる研究領域として発達している。

しかし、「理論」といっても厳密な意味での理論とはいいがたい。様々な系譜から由来しているので、確定した概念規定や統一された理論体系を構築するまでには至っておらず、用いられる用語や定義すら、しばしば重複し、曖昧なのである。ネーデル (1957=1978) が述べているように、たとえば「役割」という基本的概念においてすら、焦点の置き方に相当のズレがある。役割とは、所与の社会的体系によってあるいは社会的位置そのものから与えられてあるものなのか、それとも相互行為過程という文脈の中に生起するものなのか、したがって変化しつつあるものとみなすべきなのか。そもそも規範的期待なのか、遂行されている行動なのか、あるいは認知された行動様式なのか、など百花繚乱の現状があるのである。

このような現状において、斎藤 (Nadel, 1957=1978) が、役割理論で様々に論じられてきた役割概念について、最大公約数的にその共通項を抽出したものが次である。

『役割とは特定の社会的位置との関連で、直接に対応する他者ばかりでなく、ある程度社会一般からもその位置にふさわしいと見なされている一連の行動様式の属性である。』

しかし本論は、相互作用視点を基盤とする家族療法の立場を採っている。役割を論じる際には、相互作用の視点を加味する必要がある。役割はコミュニケーションのあり様に反映され、またコミュニケーションとして現れ維持されると考えるからである。筆者はこれまでこういった立場から役割の再定義を行ってきた (石井, 2002, 2004, 2005)。本論でも石井 (2005) の定義を用いるが、そのためにまず、コミュニケーションについて整理しておきたい。

家族療法では、コミュニケーションを「相互拘束」(長谷川, 1991)と定義する。非言語を含めた互いのことばが、相手の次の行動を決定はしな

いが拘束する（制限する）、その相互に交わされる営みがコミュニケーションなのである。拘束とは任意のメッセージ（情報）によって「受信者の反応の選択幅を制限する」（長谷川，1991）ことである。コミュニケーションとは互いに相手の反応の選択幅を制限しあう「相互拘束」と定義できるのである。

役割によって人間コミュニケーションは円滑になる。役割には、企業の専務や課長など“役柄”として公的に定められているものもあれば、家庭における父親や子どもなどのように自然すぎて言及されにくいものもある。いずれにしても役割が定まっていることによって、コミュニケーションのあり様は制限されている。

たとえば、ある大企業でひとりの新入社員が社長からじきじきに名前を尋ねられたとする。そのときこの新入社員はどのように反応するだろうか。予想としては、姿勢を正してはっきりと名乗ろうとするだろう。緊張してうまく答えられないこともあるかもしれない。しかし、尻文字で自己紹介することはなかなか考えにくいのである。この新入社員の反応の選択幅は、「新入社員」という役割によって、さらに狭められているわけである。そこで本論では、コミュニケーション（相互拘束）のあり様そのものを拘束するという点から役割を“拘束パターンの拘束”であるとした、石井（2005）の定義を採用する。

こういった役割の機能、すなわち相互拘束であるコミュニケーションをさらに拘束する機能を、石井（2001, 2002, 2004, 2005）はコミュニケーションの経済性と呼んできた。コミュニケーションの経済性とはつまり、コミュニケーションが役割によって節約されるということである。たとえば石井（2004）では、役割を明確にすることにより、コミュニケーションに経済性が生じ、具体的には、「聞き手が、話し手の発言を遮ってしまう割り込み発言を抑えることにより、円滑なコミュニケーションを妨げてしまうリスクを減らす」形で生じることが示唆されている。

コミュニケーションは相互拘束であるが、役割

によってそれがさらに拘束されることによって、より目的的なコミュニケーションを可能にするのではないかと考えられる。

3. 本研究の目的

石井（2006）では問題言及場面へのコミュニケーションの介入を考え、二者間の問題言及場面において、「和やか」「真剣」のコミュニケーションを拡張していくのがより有効であると示唆した。しかし、問題言及場面という即時的で限定された場面だけでなく、日常の場面において可能な介入もあるであろう。実際、家族療法においては、合同面接場面でじかに問題言及の会話に介入するよりも、課題を出し日常場面で取り組んでもらうという介入を用いることが多い。よって、即時的な問題言及場面と日常の対人関係のどちらも視野に入れた検討がなされる必要があると考えられる。

持続する関係において日常の対人関係と即時的な会話場面を考えると、役割関係という概念は非常に重要であると考えられる。即時的な会話が役割関係を含めた日常の対人的な関係を作りうるし、石井（2004）により示唆されているように、役割関係が即時的な会話のあり方、コミュニケーションを規定することもあると言えるからである。

よって、一時的で即時的な場面である問題言及場面においてのコミュニケーションの認知と、役割のあり方の認知が関連があるのか検討するのは、意義のあることであると考えられる。

例えば「家族儀式」など、役割を用いた介入の有効性はすでに示唆されているところである（石井, 2005）。役割の認知と、問題解決度や会話満足度や問題言及場面におけるコミュニケーションの認知との関連が明らかになれば、クライアントにとっても受け容れやすく問題解決に効果的な、役割の規定や変換等を用いた介入を検討することが可能であろう。

そこで本研究では、役割関係尺度を作成した後、役割関係尺度と問題言及場面におけるパートナーに対する自分のコミュニケーション認知尺度、問題解決度尺度、会話満足度尺度との関連を検討す

る。そして、問題解決により有効な介入を検討することを目的とする。

II 方法

1. 調査対象及び手続き

重要な他者（配偶者・恋人・親・友人等）とのコミュニケーションを想定してもらう質問紙を共学の4年制大学及び4年制女子大学の講義において配布し、回答してもらった。そのうち本研究では、恋人とのコミュニケーションを想定している18歳～28歳までの男女113名を対象とした。そのうち、回答に不備のあったものを除き、男性31名、女性71名の102名を分析の対象とした。平均年齢は20.56才（SD=2.27）、交際年数の平均は17.6ヶ月（SD=17.2）であった。

2. 調査時期

2006年4月～2006年6月。

3. 調査内容

調査内容は、以下の通りである。

- (1) 回答者の属性（年齢、性別、職業、家族構成、学歴等）
- (2) 問題言及場面におけるパートナーに対する自分のコミュニケーション認知尺度（16項目）

質問項目は石井（2007）が作成した尺度を使用した。「和やかに笑顔で相手の話を聞いた」などの和やか因子6項目（ $\alpha=.59$ ）、「普段より声が大きくなった」などの積極因子4項目（ $\alpha=.66$ ）、「うつむいていた」などの回避因子4項目（ $\alpha=.55$ ）、「真剣な表情で話した」など真剣因子2項目（ $\alpha=.54$ ）から構成されている。

1. やわらかい口調で話した
2. なごやかに笑顔で話した
3. 相手の話に共感的にうなずいた
4. なごやかに笑顔で相手の話を聞いた
5. 「～だ」「～だよ」など断言的な言葉が多かった

6. 身振り手振りが多かった
7. 手近にあるものを触っていた
8. 真剣な表情で話した
9. うつむいていた
10. あまり発言しなかった
11. 「うーん」「あー」などの間投詞が多かった
12. 相手の目を見て話を聞いた
13. 自分の意見をたくさん述べた
14. 真剣な表情で相手の話を聞いた
15. 普段より声が大きくなった
16. 言いにくいことをいうときに笑いながら話した（反転項目）

(3) 問題解決度尺度（6項目）（ $\alpha=.86$ ）

石井(2006)の質問項目を採用した。

1. 問題が解決に近づいた
2. 問題が解消した
3. よりよく変化した
4. 問題が整理された
5. 問題点が明確になった
6. 問題に向き合えた

(4) 会話満足度尺度（7項目）（ $\alpha=.89$ ）

石井（2006）の質問項目を採用した。

1. 相手の意見に納得できた
 2. 自分の意見を理解してもらえた
 3. 話し合ってよかった
 4. 相手に対して腹が立った（反転項目）
 5. 話し合いにストレスを感じた（反転項目）
 6. 話し合いによって二人の関係がより良いものになった
 7. 話し合いは満足のいくものだった
- なお、(2)～(4)の項目については、「非常にあてはまる（1点）」から「全くあてはまらない（4点）」までの4段階評定でたずねた。

(5) 役割関係尺度（7項目）

今回新たに加えた項目である。

1. 2人の間では役割分担が決まっている
2. 物事を解決するとき、2人でよく話し合う
3. 主導権を握るのは、いつも同じほうである
4. 2人の中の決まりを柔軟に変えることができる

5. 遊びに行く場所など、物事を決めるのはいつも同じほうである
6. 2人の間の役割分担は、必要に応じて変わる
7. 2人でやらなければならないことは、協力して行う

なお、役割関係尺度の項目については、「非常にあてはまる（1点）」から「全くあてはまらない（5点）」までの5段階評定でたずねた。

Ⅲ結果

1. 役割関係尺度の因子構造

普段のカップルの役割関係の構造を明らかにするため、質問項目の因子分析を行った。主因子法、プロマックス回転による分析を行った結果、初期解における固有値の減衰状況から判断して2因子が採択された。2因子以上にわたって因子負荷量が.30以下の項目を削除し、再度分析を行った（Table 1）。第一因子は「2人でやらなければならないことは、協力して行う」「2人の間の決まりを柔軟に変えることができる」「2人の間の役割分担は、必要に応じて変わる」の負荷量が高かったため、「役割柔軟」因子と命名した。第二因子は「主導権を握るのは、いつも同じほうである」「遊びに行く場所など、物事を決めるのはいつも同じほうである」の負荷量が高かったため、「役割固定」因子と名づけた。

2. コミュニケーション認知・問題解決度・会話満足度と役割関係尺度の下位尺度得点との関連
コミュニケーション認知、問題解決度及び会話満足度の合計得点を算出した。その平均をTable 2に示す。

また、役割関係尺度の各因子に含まれる項目の合計点を算出し、下位尺度得点とした。そして、コミュニケーション認知、問題解決度及び会話満足度と下位尺度得点の相関を検討した。その結果をTable 3に示す。

「役割柔軟」得点について、「和やか」得点と

の間に強い正の相関が見られ、問題解決度及び会話満足度との間に弱い正の相関がみられた。

Table 1 役割関係に関する因子分析結果（プロマックス回転後）

項目内容	因子1	因子2	共通性
7. 2人でやらなければならないことは、協力して行う	.795	-.112	.587
4. 二人の間の決まりを柔軟に変えることができる	.694	-.263	.506
6. 二人の間の役割分担は、必要に応じて変わる	.589	-.303	.407
3. 主導権を握るのは、いつも同じほうである	-.201	.631	.398
5. 遊びに行く場所など物事を決めるのはいつも同じ方である	-.167	.550	.302
α 係数	.732	.514	

Table 2 問題解決度得点及び会話満足度得点の平均

	平均	SD
和やか得点	14.40	3.23
積極 得点	11.14	2.74
回避 得点	11.25	2.63
真剣 得点	3.87	1.52
問題解決度	13.91	3.98
会話満足度	14.73	5.08

Table 3 下位尺度得点とコミュニケーション認知、問題解決度及び会話満足度との相関

	役割柔軟因子	役割固定因子
和 や か	.303**	.047
積 極	-.098	.135
回 避	-.077	.145
真 剣	.012	.155
問題解決度	.391**	.038-
会話満足度	.455**	.066

** $p < .01$

IV 考察

結果から、カップルの役割関係が柔軟であるほど、問題言及場面においても和やかなコミュニケーションを行っていることが示唆された。また、役割関係が柔軟であるほど、問題に対する解決達成感や会話の満足感も高くなることが示唆された。

これらより、役割の柔軟性を高めるといった、より間接的な介入も問題言及場面における問題解決に有効であると考えられる。

石井（2006）では問題言及場面へのコミュニケーションの介入を考え、二者間の問題言及場面において、「和やか」「真剣」のコミュニケーションを拡張していくのがより有効であると示唆した。本研究ではさらに、問題言及場面という即時的で限定された場面だけでなく、日常的な役割関係への介入も有効であることが示唆されたといえよう。

役割が柔軟であるとは、いわばTPOにあわせて役割関係のあり方を工夫できると言い換えることもできよう。その場その場で石井（2005）のいうコミュニケーションの節約の仕方を変えているといえる。このような場合は、コミュニケーションの経済性が、有効に働くのではないかと考えられる。一方、役割が固定している場合、どのような場面でも決まった役割をとりがちであると言い換えることができる。ある場面で適切な節約の仕方が、別の場面でも適切であるとは限らない。このような場合には、時にコミュニケーションの経済性が悪循環を招くこともあるだろう。

問題言及場面は、葛藤場面であり、解決に向けて柔軟な対応が望まれている。普段から日常的な役割関係を柔軟にしておくことは、即時的な問題言及場面向き合う際にも役立つのだろうと考えられる。

<引用文献>

- Bateson, G. (1972) Steps to an ecology of mind. New York: Ballantine Books. (佐藤良明訳 1990 精神の生態学 思索社.)
- Fisch, R., & Ssclanger, K. (1999) Brief therapy with intimidating cases. Changing the Unchangeable. Jossey-Bass Inc. (長谷川啓三監訳(2001)難事例のブリーフセラピー 金子書房.)
- 長谷川啓三 (1987) 家族内パラドックス 彩古書房.
- 長谷川啓三 (1998) 家族療法と治療言語 — コミュニケーションのマネジメント側面について — 家族療法研究, 15, 175-179.
- 長谷川啓三 (2003) コミュニケーションのマネジメント側面 東北大学大学院教育学研究科臨床心理相談室紀要, 1, 3-9.
- Hasegawa, K., Kodama, M., & Ushida, Y. (1996) Interactional Gestures. MRI International Conference in Vienna. Manuscript.
- 長谷川啓三・若島孔文・田上恭子・小林愛・渡部敦子 (1998) コミュニケーションの「やりくり」の側面に関する実験的研究 日本家族心理学会, 第15回大会発表抄録集.
- 長谷川啓三・若島孔文・渡辺敦子・斎藤聡子・佐藤宏平 (1998) コミュニケーションのマネジメント的側面に関する実験的研究 I 日本家族心理学会, 第15回大会発表抄録集, 18.
- 平山 (2001)
- 生田倫子 (1999) 葛藤場面における表情の自己制御の機能について カウンセリング研究, 32, 157-162.
- 生田倫子 (2003) 対人システムの自己制御機構に関する臨床心理学的研究 東北大学教育学研究科学学位論文.
- 生田倫子・若島孔文・長谷川啓三 (1999) 葛藤場面における表情の自己制御の機能について — 葛藤方略の検討 — 家族心理学研究, 13(2), 115-122.
- 石井佳世 (2006) 問題言及場面におけるコミュニケーションに関する臨床心理学的研究 — 問題の維持と変化の観点から — 東北大学教育学研究科学学位論文.
- 石井宏祐 (2001) “役割”の明確化がもたらすコミュニケーションの経済性について — 問題解決場面におけるリーダーシップの語用論的研究 — 東北大学大学院教育学研究科平成14年度修士論文 (未公刊)
- 石井宏祐 (2002) 役割の明確化によってもたらされるコミュニケーションの経済性に関する研究 — 問題解決場面におけるリーダー役割を題材として — 日本産業カウンセリング学会第7回大会発表論文集
- 石井宏祐 (2004) 人間コミュニケーションは役割関係の有無によっていかに影響されるか — コミュニケーション維持のパターン化における差異に着目して — 日本産業カウンセリング学会第9回大会発表論文集
- 石井宏祐 (2005) 「役割」論再考 — インタラクショナル・ビューから役割を考える — 長谷川啓三編 現代のエスプリ 456 「臨床の語用論Ⅱ」 至文堂.
- 石井宏祐・石井佳世・三谷聖也・長谷川啓三 (2005) インタラクショナル・ビューを臨床に活かす — 短期家族療法のユニークな視点 長谷川啓三編 現代のエスプリ 456 「臨床の語用論Ⅱ」 至文堂, 72-86.
- 斎藤憲子・上西創・石井宏祐・長谷川啓三 (2005) インタラクショナル・ビューを臨床に活かす — 介入をコミュニケーションとして考える — 日本家族心理学会第22回大会発表論文集, 21-22.
- 若島孔文 (2000) 葛藤の会話場面における「回避的コミュニケーション」の生起のメカニズムに関する研究 — ディスクオリフィケーションが生起する状況の解明に向けて — 東北大学教育学研究科学学位論文.

**A Clinical Psychological Study on the effective Therapeutic Interventions
for the Vicious Circle of the Communication between both partners:
From a Viewpoint of the Role theory.**

Ishii (2006) investigated how couples treat their communication at dialogue of problem as, and developed the Communication Scale. Then Ishii pointed there were correlations between the “Smiley type” communication and the Satisfaction of Conversation Scale, “Eager type” communication and the Satisfaction of Conversation Scale, and “Eager type” communication and the Problem-Solution Scale.

There is a possibility that how couples treat their communication at dialogue of problem as relate to how they are aware of their role in usual day. Then the purpose of this study is to investigate their relation, and search more useful intervention to solve a problem.

A sample of 104 people (ages 18-28 years) completed questionnaires including the Communication Scale, the Problem-Solution Scale, the Satisfaction of Conversation Scale, and the Role Scale.

By factor analysis of the Role scale, the obtained samples were classified 2 types of Role, and named the “Role fixed type”, and the “Role flexible type”. The “Role flexible type” was positively correlated with the “Smiley type” communication, Problem-Solution Scale, and the Satisfaction of Conversation Scale.

These results confirmed that couples thought their Roles were more flexible, they thought their smiley communications were more frequent. And, their Role is more flexible, the higher Problem-Solution point, and the higher Satisfaction of Conversation point.

Therefore, indirect interventions that make their Roles more flexible are useful to solve problem.

Keyword : Role, Family Therapy, Intervention, Dialogue of problem, couple, communication